

分苑たより なごみ

大本
名古屋分苑

分苑長 水無月 月次祭挨拶

サルートン
皆様こんにちは

六月二十日に梅雨入り宣言があり、梅雨の足元が悪い中水無月の月次祭にご参拝頂きありがとうございます。

五月二十六日には青松会錬成道場が名古屋分苑の担当で、この分苑を会場に開催され、東海教区の青松会員が集まりました。

今月、十五日・十六日は皆神山記念祭典が教主さまご臨席で執行されました。

前日の夕食会には、教主さまもお見えになり楽しい一時を過ごさせて頂きました。

翌日は、早朝にわか雨が降っていました、朝食を済ませ山へ上がる時には朝日が照りだして素晴らしい祭典日よりになりました。

祭典が終わり直会後には、

当日参拝にお見えになった方々全員に教主さまのご面会が教区毎で行われました。

週間天気予報ではこの期間は、雨でしたが素晴らしく天候に恵まれた気持ちよい祭典でした。

名古屋分苑では、この月、分所支部長、支部総代の改選があり、すでに本部には書類提出しています。

その中でも、残念な報告があります。

波多野 寛さんが長年支部長として活躍されていた熱田支部が、今回の改選で支部を解散されます。

既に支部の大神様には感謝祝詞を奏上されて長生殿へ返納されるだけになっておられます。今後は、分苑直属になります。

今日は、直会後に、新分苑総代による分苑長選出の総代会を開催いたしますので宜し

くお願いいたします。

来週の三十日、日曜日には、教本一級認定講習会を開催いたします。まだ受講希望者の欄に氏名を記入されていない方は宜しくお願いいたします。

本日の参拝誠にありがとうございました。コーランダンコン

行事報告

●東海教区青松会錬成道場
日程 五月二十六日(日)
十時～十五時

開催担当機関 名古屋
参加者 合計十五名
前田特派、三河一名、静岡四名、三重一名、岐阜一名、松香一名、名古屋六名

初めにアンケート「後継者育成に関して」を取得し、その後、実施した朗詠は参加者の多くが経験者ということもあり思った以上に出来が良く爽快でした。

午後の前田特派の後継者に関する講話では、子は親の背中を見ている旨を再認識できました。



最後は午前中に取得したアンケートの集計結果に基づき意見交換しました。

後日、前田特派にアンケートの考察を頂きました。

●月始祭 六月一日(土)

参拝者 二十名

齋主 五十川 松子
祭員 國方 千愛
祭員 島山 亜美
進行 飯田 直美

直心会の祭員・進行により執行され、併せて企業繁栄祈願祝詞が奏上された。



●月次祭 六月二十三日(日)

参拝者 三十四名

齋主 近藤 哲史
祭員 島山 茂
祭員 日比 達朗
裏方 仙頭 志音
典礼長 石原 松生
伶人 小林 清人
伶人 飯田 直美
伶人 澤田 淳
伶人 長谷川 美枝
伊藤 恵美子
天野 静子



●海津市松植樹地 献労作業

六月二日

(日) 朝、名

古屋地方は雨が降り出しましたが、植林地の状況を見



るため現地向け出発しました。桑名を過ぎ岐阜に入った頃から雨は上がりました。

今迄、葦の葉が茂っていましたが今回は雑草だけでした。蟻が松の新芽にたむろしていたのが3本あり蟻消毒剤を散布しました

参加者は、日比さん、小林さん、畠山さん、私夫婦で休憩をしながら作業を無事終えました



●皆神山 記念祭典

六月十六日(日) 午前十時

より、長野主会の主催で教主さまご臨席のもと執行された。名古屋分苑からは二十名が参拝し、堀健太郎氏が祭員・高嶋善雄分苑長が祭典準備係・飯田直美氏が伶人としてご奉仕された。

行事予定

七月二十一日(日)

月次祭 午前十時半より

八月三日(土)

月始祭 午後一時半より

八月七日(水)

瑞生大祭 遥拝祭

午前十一時より

忍び草

みなと会合所

畠山康子 毘女

享年 九十二歳

令和六年五月二十日 帰幽

神ノ倉分所

宣伝使 藤沢良 毘古

享年 八十八歳

令和六年六月二十三日 帰幽

謹んで哀悼の意を表します

「大本開祖伝」に思う

神ノ倉分所 山田謙三

開祖さまのご生涯は、赤貧と艱難辛苦の連続の生活の中で、最後まで誠一筋を貫かれ、国祖大神様が神懸かりされるという奇跡のご生涯であり、涙なしに読むことができませぬ。大本信徒必読の書であると同時に、世の中の多くの人にお配りして読んでいただきたいものだと思えます。

開祖さまは「ある時ただ一度、さびしげに石臼に半身をもたれ、じつと首を垂れていられたことがありました。私たち子供に明日はどうして食べさせてゆこうかという悩みであったのです。」

家計を省みず極貧の原因をつくり、全身不随で手数ばかりかかる病人の夫政五郎に対しても、心の限りをつくしてお世話され、「天にも地にもかけがえない唯一人の良人をなくし、せめてもうすこしお世話がしたかった」となげかれた。そして国祖大神様の神懸か

り、「三ぜん世界一度に開く梅の花、良の金神の世に成りたぞよ。梅で開いて松で治める、神国の世になりたぞよ、三千年世界の立替え立直しを致すぞよ。万古末代続く神国の世に致すぞよ。神の申したことは、一分一厘違わんぞよ。」この明治二十五年旧正月の初発の神勅は、現実の世の中、人類のありさまと、神の实在を宣言され、神の壮大なご意思が短い言葉で端的に余すところなく述べ

られた。開祖さまは「先生、ありがとう」と、その真心をねぎらわれましたが、聖師さまが帰られると梅田やすさんに小声で「おやすさん、この大本がなんぼ大きくなっても私は少しもうれしくありません。一人でも誠の者が増えてくれることを待っております」と話された。開祖の願いは、神苑、建物など外面的な形が整うことではなく「誠の者」が一人でも増えることでありました。

これを読めば、神を信じないという人も神の实在を感じる事ができることと思えます。私達はこの初発のご神勅を胸に刻み、日々祝詞のように唱えることによって、神のご守護を身近に感じ、神の道を歩ませていただけるものと思えます。

開祖の人柄は、深き慈愛の心を生涯失わず、誠を貫く人であった。「不言実行」「天地のご恩」「他者への思いやり」「質実剛健」「大難を小難に、小難を無難に」をひたすら祈り続ける「無私」の心の人でありました。

開祖の願いは「誠の者」でした。立派な姿に変わりゆく神苑の姿をどうしてもお目にかけてようと思われた聖師さまは、開祖さまを背負って、「こども大本になりました」と神苑内を案内さ